



## 👁️👁️ みどころ

久々に骨太の、映画らしい映画を堪能。もっともそれは、集中しなければわかりにくいこと、観ていて疲れることと同義語であり、2度観ることを要求されることか? 「米餅少女」と称される女子高校生殺害の真犯人は誰? そんなミステリーの視点からも興味深い、それ以上に味わいたいのは原題の「MOTHER」とは? 出来の悪い息子ほど可愛いらしいが、本作にみる母と息子の絆とは? あっと驚く結末を含め、あなたの心に残る一作となること確実だ。

\* \* \* \* \*

## 韓国では、こんな映画らしい映画が

最近の邦画はテレビドラマの延長のようなものが多いが、韓国ではポン・ジュノ監督が本作のような映画らしい映画を完成。何がテレビドラマの延長で、何が映画らしい映画なのかを明確に説明するのは難しいが、その分岐点として私が最も重視するのは、集中して観るのを余儀なくされるか否かということ。連続テレビドラマは1週間見逃しても大筋はわかるようになっているし、観ている最中にトイレに立っても再びストーリーに戻れるが、セリフや説明が少なく、そのうえ画面が暗くてわかりにくいとなれば、観客は必然的に目と耳をスクリーンに集中せざるをえなくなる。去る9月11日に観たポーランドのイエジー・スコリモフスキ監督の『アンナと過ごした4日間』(08年)はその典型だったが、本作もそれに近い。

画面が暗くてわかりづらいのは、撮影技術が悪いから? セリフが少ないのは、脚本家がサボっているから? いやいや、そうではない。女性のヌードと同じで、何でもあけっぴろげに見せればよいというものではなく、チャリズムがヌード芸術の真髄? それと同じよう

に(？) チャリチャリとスクリーン上で問題提起をして観客に興味を持たせ、観客自らに考えさせるのが映画らしい映画だと私は考えている。ポン・ジュノ監督の『ゲムル-漢江の怪物-』(06年)は1301万人という韓国最大の観客動員数を誇っているが、私は『殺人の追憶』(03年)や本作のポン・ジュノ監督の方が好き。なぜなら、この方が映画らしい映画だと私は思うから。

## 香川照之の絶賛をどう受け止める？

私はキネマ旬報に連載している香川照之の「日本魅録」を楽しみに読んでいるが、キネマ旬報9月下旬号で彼は本作を絶賛している。ポン・ジュノ監督の前作『TOKYO!』(08年)に出演していた香川は、いわばポン・ジュノ組の一員だから彼の絶賛をどう受け止めるかは難しい。たとえば、彼の最後の文章である「そして今、はっきりと言おう。怪物ポン・ジュノの才能に、世界が、世界中が平伏すべきだ、と-。」は多少値引きして考える必要がある。しかし、その直前の「これは二度観る映画だ。異質なワンカット目からしかりと『大河』を感じるべき映画だ。」には私も全く同感。

なるほど、この展開にはこの伏線が？この時の母親の気持は？結局、犯人は？などと考えながら観れば、きっとあなたも1度目よりも2度目の方がポン・ジュノ監督に拍手したい気持が強くなるはずだ。

## 取調べ手法に異議あり！可視化が不可欠！

日本では裁判員裁判が始まり、また民主党政権が誕生する中、「取調べの可視化」が現実的なテーマとなってきたが、韓国映画を観て私がいつも問題だと思うのは、韓国警察の捜査のあり方。ポン・ジュノ監督の『殺人の追憶』もその典型で、私は「弁護士としての目で憲法や刑事訴訟法に定められた適正手続や被疑者の権利の保護の視点からいうと、この映画の捜査方法には大いに問題がある」と書いた(『シネマルーム4』245頁参照)。

本作の殺人事件の被害者は女子高生のムン・アジョンだが、ビルの屋上で彼女の死体が発見された後、トジュン(ウォンビン)が逮捕されるまではわずか数日。トジュンが殺人の容疑者とされたのは、遺体の近くにトジュンの名前が入ったゴルフボールが落ちていたためだが、それだけの証拠で逮捕できるの？

映画の冒頭、ベンツによるひき逃げ事件をめぐってゴルフ場で展開されるベンツの4人組VSトジュンとその友人ジンテ(チン・グ)との乱闘騒ぎを取り調べたジェムン刑事(ユン・ジェムン)も両者に示談を勧めるばかりだから、私の目にはかなりいい加減。そんなどうでもいい事件(?)には目をつぶるとしても、殺人事件の逮捕がたったこれだけの証拠で認められ、後は自白を強要するだけ、とはいかにもひどい。本作にみる韓国での取調べの実態をみれば、取調べの可視化が必要なことには誰もが一致するのは？

## 「こんな弁護士ばかり」と思われると・・・

本作にみる警察の捜査がひどいものなら、弁護士の対応はもっとひどい。弁護士だってお金を稼ぐ必要があるのは当然だが、コン弁護士が弁護士の特権である取調べ段階での被疑者面接の権利をロクに行使せず、ケータイの着信音が鳴ると「今日はこれくらいで」と早々に切り上げるのはもともとやる気がない証拠。そのうえ、事務所を訪れてきたトジュンの母親（キム・ヘジャ）に対して居留守を使ったり、露骨に弁護士費用の増額要求をする姿は何とも見苦しい。さらに私が気に入らないのは、同期の精神科医師や同期の検事を従えて、「刑務所の15年より、精神病院の4年の方が・・・」と強引に司法取引(?)を薦めること。日本は急激な弁護士増員のおおりに受けて近時弁護士の質の低下が危惧されているが、それでもこんなひどい弁護士は少ないはず。こんな弁護士ばかりと思われると、えらい迷惑だが・・・。

## 「米餅少女」とは？変態電話とは？

買春をいくら規制しても援助交際や出会い系サイトはなくなるが、それはいつの時代でもその方面の需要と供給が存在するから？ポン・ジュノ監督は殺された女子高生アジョンの家族関係や男関係を直接は説明してくれないが、あてにならない警察や弁護士に代わってトジュンの母親がアジョンの友人関係の調査を進めていくと、次々と意外な事実が判明。その第1のキーワードは「米餅少女」だが、それって一体どんな意味？さらに、いかにも不良少女らしいアジョンの仲間に接触すると、そこでは変態電話という新しいキーワードが。さて、変態電話とは？

世の中は常に変化していくから新しい言葉についていくのは大変だが、本作をみてそんな言葉もしっかり学習しなければ。

## さすが、写真館の経営者の目は？

映画冒頭のシーンをみれば、トジュンの母親は漢方薬を作る仕事をしているらしいことがわかる。しかし、トジュンの母親の友人（お客？）らしい女性ミソン（チョン・ミソン）に鍼治療を施している姿や、「トジュンはとても美しい“子鹿のような目”をしているわ」などと2人の中で交わされる会話をみると、その施術の合法性に問題があることがみえてくる。鍼治療も医療行為だから、免許を持った人間でなければ施術できないのは、きっと韓国も日本と同じだ。

私が大好きな映画のベストワンに挙げる『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）のオープニングシーンは、オーストリアの山の中でジュリー・アンドリュース扮する修道女マリアを上空からのカメラが次第にクローズアップでとらえていき、その表情をとらえた途端に「THE HILLS ALIVE WITH THE SOUND OF MU

「S I C」という主題曲を歌い始めるシーン。本作のオープニングはそれと同じように大平原の中で母親が一人小さく踊り始めるシーンだが、こりゃ一体ナニ？ 前述の日本魅録で香川照之はこの点について「ともかくも、まずはオープニングカットの異様な違和感を見てほしい。大丈夫か？と思わせるようなその異質感」と書いているが、これも私は全く同感。そしてまた「その後のまったりとした展開」と彼が表現する雰囲気の中で、母親とミソンのシーンが出てくるわけだ。したがって、こんなシーンが一体何を意味するのか、あなたにも容易に理解できないはず。

しかして、後半この女性が写真館の経営者であることが明らかになるとともに、さすが写真館の経営者の目というシーンが登場する。なるほど、こういう構成こそがテレビドラマではない映画らしい映画であり、ポン・ジュノ監督が自ら原案を出し、自ら脚本を書き上げた功績なのだ。そんな風に私は納得したが、さてあなたは？

## 真犯人は誰？ ミステリーの視点からは？

本作はアガサ・クリスティーのさまざまな推理小説のように犯人捜しを楽しむ映画ではなく、母親と息子の絆をテーマとした骨太作品。しかし女子高生アジョンが殺された以上、その真犯人が誰か？ が明らかにされなければ観客はきっと消化不良に？

そんなミステリーの視点からみて面白い登場人物は、第1に警察に愛想をつかし雨の中を傘をささないまま歩いていく母親がすれ違う廃品業者の老人。そして第2に、米餅少女アジョンを愛していたという祈禱院を逃げ出した若者ジョンバル。アジョンが死体となって発見された前の夜、トジュンがジンテと待ち合わせていた飲み屋マンハッタンでジンテと会うことができないまま、飲み屋のマダムの娘ミナにちょっかいを出したこと、そしてまた、その帰り道、トジュンの前を歩くアジョンに対してトジュンが「どこへ行くの」と声をかけ、さらに「男が嫌い？」と問いかけたことはどうも事実のようだ。しかして、その後2人の間に起きた出来事とは？

もし廃品業者の老人がそんな2人の姿を目撃していたとすれば？ そんなミステリーの視点からは、真犯人は誰？ は当然の疑問だが・・・。

## 「証明」は余分？ 「MOTHER」でオーケー？

本作の原題は「MOTHER」だが、邦題は「母なる証明」。森村誠一の小説を同じタイトルで映画化した『人間の証明』（77年）や『野性の証明』（78年）においては、「証明」という言葉に大きな意味があったが、さて本作をあえて『母なる証明』としたことの意味は？

母親は自分のお腹を痛めた子供を盲目的に愛するものだから、母親が一人息子トジュンがアジョン殺しの犯人ではないと信じたのは当然。そこでまず、「こいつが犯人だ！」と白羽の矢を立てたのがトジュンの悪友のジンテだが、どうもそれは濡れ衣だったようだ。ジ

ンテから「ふつう殺人の動機は、金銭、痴情、怨恨のどれかだ。アジョンの場合はどうだ？貧乏だったから金銭トラブルじゃない。考えられるのは、痴情、怨恨のどちらかだ。だからアジョンの周辺を調べるべきなんだ」と刑事コロボ顔負けの指摘を受けたトジュンの母親は、以降を得た魚のようにすばらしい調査を展開していく。

映画上「母親」の年齢は明らかではないが、母親を演じた「韓国の母」キム・ヘジャは1941年生まれ。68歳ともなれば思考力も行動力も衰えるはずだが、本作にみる「母親」の思考力と行動力は刑事や弁護士をしのぐものがある。そんな原動力は一体どこに？それが本作のテーマだとすれば、邦題も「証明」は余分で、原題どおり「MOTHER」で良かったのでは？

2009(平成21)年10月1日記

あなたは殺人の遺徳(いとく) (03年)と「グエムル(06年)のどちらが好き? 私は前者を引きれない」韓国のスビルバーグ(こと奉俊昊監督の最高峰が誕生! 韓流命のおぼさまの目当ては、トジュン役が兵役復帰第1作となる韓国四天王の1人元斌だろう)が、注目は原題「MOTHER」通り、韓国の母

金恵子。「この子を守るのは私しかない」をテーマに、母とは? の普遍的・根源的問い掛けを。 静かな町で無惨な女子高生の死体を発見、犯人は名前入りゴルフ球を落としたトジュン。なぜ韓国の警察はこんなに単純なの? 自分を迫る取り調べ、金をせびり司法取引を迫る著名弁護士(姿をみると、韓国は冤罪天

類の不良少女、廃品業者の老人、祈禱院を逃げ出した少年、母からヤミの鍼治療を受ける写真館の女などのキーマンが登場するが、本作の真の狙いはきつと別。 平原の中で母が一人踊る冒頭の奇妙なシーンは「サウンド・オブ・ミュージック(1965年)の冒頭を彷彿とさせるが、その意味は? 中盤にみせる警察をはるかに凌ぐ母の捜査力の原動力は? 重大な目撃証言を得た母が見せる、あつと驚く直線的行動とは?

安易・平板な邦画に馴れた目には本作の理解は難解。しかも映像技術が進んだ今、なぜこんな暗くて見にくい画面が連続? そんな疑問を持っては監督の狙いはきつと半分達成? 愛用の治療針を重要な小道具とした、あらゆる想定を感えた結末と、原題にも邦題にも納得の冒頭シーンの再登場に、きつとあなたは脱帽!



102

## 「母なる証明」

(31日から梅田ブルク7ほかで公開)



© 2009 CJ ENTERTAINMENT INC. & BARUNSON CO., LTD. ALL RIGHTS RESERVED

# 母とは? その根源的問い掛けは?

## ついに中国デビュー！『取景中国』を中国で出版！

北京電影学院での特別講義という夢が07年10月に叶った私の次の夢は、中国での中国語による中国旅行・中国映画評論本の出版となった。北京電影学院での特別講義は同学院客員教授という肩書をもつ古澤敏文さんとの出会いから実現したが、今回の出版は、日中パイリンガル作家で現在神戸国際大学教授、神戸市外国語大学客員教授、上海テレビの対談番組への準レギュラー出演など、日本と中国を股にかけて大活躍中の毛丹青さんとの出会いによって実現したものだ。

中国からの留学生に紹介されて彼とはじめて会ったのは、08年3月19日。あいにくの雨の中、スーツ姿で自転車をこぐ私の姿に興味を持ってくれた毛さんと即意気投合。何度か食事を共にし親交を深める中、中国語での出版のプロデュースを快く引き受けてくれることになった。当初は日本人弁護士兼映画評論家坂和章平による中国映画論のようなイメージでの出版を考えていたが、08年8月22日～24日の上海旅行で市場リサーチ等を行った結果、中国旅行記をメインとしたものに大きく方向転換。そこで、ホームページに書いていた2000年から10回以上に及ぶ中国旅行記をメインにし、映画紹介をサブとする方針で原稿を手直しし、翻訳に回した。そして、09年3月24日～27日の北京・上海旅行では本に掲載する

写真撮影をし、8月に上海で開催されるブックフェアへの出展を目指すことになった。以降急ピッチで編集作業が進み、09年8月『取景中国 跟着电影去旅行 Shots of China』が完成した。タイトルとサブタイトルの意味は、映画と共に中国を旅する中で私なりに切り取った中国の風景というものだ。

記念すべき中国デビューは、末広がりの09年8月18日。毛さんと共に世界各国の書籍を集めた「2009上海書展」に参加した。そこに出版された書籍は10万種類以上、新刊は6万種類、各種イベントは300を超える大舞台だ。そして、バカ広い会場の一画に、ポスターと平積みされた私の著書が。これだけでも大感激だったが、さらに会場を進んでいくと「『取景中国』 簽售暨講座」と書かれた等身大以上の大きな立て看板があり、プレゼン会場が設営されていた。そこで出版までのいきさつや狙いなどを通訳を介してプレゼンした後は、なんとサイン会に。帰国後上海書展の記事をインターネットで検索してみると、私のサイン会の2日前には渡辺淳一氏のサイン会があったとのことだ。私がサインをしたのは約10名だったが、次回は長蛇の列と中国語でのコミュニケーションを期待！夢はますます膨らむ一方だ。

2009（平成21）年11月5日記